

## 晩明の四書学

佐野, 公治

<https://doi.org/10.15017/18185>

---

出版情報：中国哲学論集．特別号，pp.79-95，1981-03-01．九州大学中国哲学研究会  
バージョン：  
権利関係：

# 晩明の四書学

佐野公治

## 一 四書学の推移

『大学』『論語』『孟子』『中庸』の四書を順次に学んでしかるのちに五経に及ぶ学習法を樹立し、四書のテキスト校定、再解釈に精力を注いで觀念体系を構築した朱子により、四書は經書学の中心に置かれた。そのうち清代にはほぼ科挙の学そのものに変貌するという消長をたどりながらも、四書学は宋代以降の經書学の主要な分野であり、とくに元明代の經書をめぐる論議の大半は四書に費されたのである。<sup>(1)</sup>

ここで四書学史を概観しよう。朱子以後、明代前半期に至るまでは、章句集註或問および朱子門下後流の四書説が繼承され、その統一的集大成に多くの関心が払われる。真徳秀の『四書集編』、趙順孫の『四書纂疏』、胡炳文の『四書通』、倪士毅の『四書輯釈』など、時には自説を附加することはあっても、おおむね章句集註を前提として諸儒説の融合を図った集大成書であった。これらにみられる朱註観は、「子朱子の四書註釈は其の意精密、其の語簡嚴、渾然として猶は經のごときなり」(趙順孫『四書纂疏』自序)、「朱子の四書註釈、格庵趙氏(順孫)嘗て謂く、其の意精密、其の語簡嚴、猶は經のごとしと。斯の言当れり」(倪士毅『重訂四書輯釈』凡例)、「我が紫陽子朱子、且く復た諸儒の大成を集めて往聖の遺蘊を揚げ、集註章句或問を作為して以て後学を恵む。……而して其の詞意渾然として猶は經のご

とし」(汪克寛『重訂四書輯釈』序)、などの文にみられる。すなわち朱註はほとんど經書と同等の価値を認められるのであり、そこでその渾然たる詞意にむけてさらに疏釈が加えられ祖述遵奉されていく。元末明初ごろの四書註に朱註が經文と同じ大きさで刻字されるのも、こうした朱註觀の反映であろう。元朝の延祐二年に実施をみた科挙において、主として程朱學の經註に準拠することを求めたのも程朱學の權威の上昇に応じたものであり、そしてその權威の確立に寄与するものであった。

明代に至って、洪武年間の科挙では程朱學の準拠は強化され、さらに永樂年間の四書大全の編纂公布によって程朱學經註は唯一の地位を保障された。「国初の諸儒、則ち孔子を撤却して專一に紫陽を崇信す。」(『世廟識餘録』卷四)、「弘(治)正(徳)以前、天下の朱子を尊ぶや、孔子を尊ぶよりも甚し」(『涇臬藏稿』卷十一「日新書院記」とは、のちの王陽明を孔子よりも尊しとする流弊の指弾に主眼のある発言で、明代前半においても朱註があくまで經の註であることが忘却されたわけではなく、それゆえ次に述べる底流も存在したのだが、ともかく専ら朱註を通じてのみ經書が理解されたこの期の動向の一端を射当てている。このように四書學においても明代前半までの基調は朱註の祖述、遵奉であった。

もちろんこの期にも、程朱學經註に対する修正主義的、批判主義的底流が存在しなかったわけではない。金代から元代初期の北中国には程朱學は浸透していなかったとされ、王若虚は集註を非とし、陳天祥もその説に加担したという。陳天祥の作とも推定される失名氏撰『四書弁疑』は朱註への批判意識を堅持している。明代に至っても、太祖朱元璋は、宋儒を腐儒と罵り、『書經』と『論語』二章の新解釈を例示して、諸儒に四書五經を釈せしめて『群經類要』と名を賜わり、『孟子』の不遜な章句八十五條を削って『孟子節文』を作成させるなど、學術に容喙した。永樂帝の謀臣となった姚広孝(道衍)は仏者の立場から『道餘録』を著して程朱學を批判した。永樂三年に朱季友が周程張朱を攻撃した書伝を上呈したのも、太祖の文教觀に触発された側面があるろう。朱子の『大学』改本の是非を論じて再訂を

試みることは宋代から行われており、洪武年間にも方孝儒はこれを論じている。<sup>(6)</sup> 下って成化年間に周洪謨が上覧に供した『疑弁録』(三卷)は、①先儒の訓釈のうち経旨に害あるもの二十四條、②経旨を誤ることがあるもの五十五條、③経旨と協わざるもの二十五條、④先儒の言外の意を發明するもの百七條を具陳した作品で、①に『論語』一條、④に『論語』十二條、学庸各一條、『孟子』四條を含む。④の『論語』の一例をあげれば、「伯牛有疾」(雍也篇)における伯牛の疾を、朱子が先儒説によって癩とみるのに対し、もしも癩病で瀕死の床にあれば「穢惡体に満ちて其の手執るべからず」といい、孔子が其の手を執つたとする経文と矛盾することを説く。これは一種の合理主義的解釈で、「寧ろ朱子の忠臣となるも、朱子の佞臣と為る毋れ」と著述の意図を説明して批判的繼承を主張するのである。

批判意識は高揚せずにはいない。楊守陳(一四二九—一四八九)の居廬七年の間に著された『諸経私抄』は、「皆な其の錯簡を正し、其の章句を更定し、其の諸儒の伝に惟だ是のみ之れ従ひ、附するに己が見を以てす。合はざる者有らば濂洛閩大儒の説と雖も、苟に従はざるなり」(『何文肅公文集』卷三十一「墓誌銘」)といわれ、弘治元年、陳公懋は経説を上覧に供せんとするも、永楽の大全を「穿鑿更改して理に悖り道を害ふ」とされて焚書還郷の罪に遭<sup>(7)</sup>ひ、王恕(一四一六—一五〇八)の『石渠意見』は自己の主観に判断根据を置いて逐條的に朱註を駁している。成化十六年ごろに完成した草稿に加筆して弘治十七年に公表された蔡清の『四書蒙引初藁』は、『四庫提要』も朱子を羽翼する作品として讃辞を与えるが、実質は大全の各章に論評を加え、諸儒説や大全所引の朱子説と章句集註との矛盾を指摘するほか、『大学』の節次についても修正を図っている。

王陽明の出現によって四書学は転機をむかえる。宋代から弘治年間ごろまでは、程朱学の遵奉を基調としながら、批判主義、修正主義が高揚する過程であるが、かならずしも自覺的体系的に反程朱学的四書観が提出されたわけではなかった。しかるに陽明は旧来からの底流を一挙に顕在化させ、自らの哲学的立場に立脚した新たな四書観(主として学庸観)を提出したのである。陽明学の成立以後は新四書学の成立期、展開期とみることができ、この劃期

はひとまづいわゆる龍場の覺睡を得た正徳二年にもとめることができる。覺睡を得た陽明は「これを五經に證して、先儒の訓釈の未だ尽さざるを覺悉」、疏解して『臆説』と名付けた。<sup>(8)</sup>そしてさらに『古本大学』を顕彰して自論の論拠とし、四方よりの從学の士を得るに至れば、必ず学庸の首章を借りて聖学の全功を指示したのである。<sup>(9)</sup>『古本大学』の顕彰の思想的意味、および学庸説の内容については山下竜二氏の詳論に従い、<sup>(10)</sup>ここでは触れない。

ところで注目されるのは、陽明学には周知のように心悟主義、実践主義が濃厚にみられるが、これが、四書学的観点からみれば、口承主義、ないしは、いわば著述禁欲志向となることである。すでに正徳三年の五經臆説序に、「五經に聖人の学具われり。然れども其の已に聞く者よりしてこれを言へば、其の道におけるや筌と糟とのみ」といい、魚を得たのちの筌、エキスを得たのちの糟粕のごとく、五經も真髓を得たのちには無用であるとする。この筌、糟粕のたとへは、晩明の四書註の好んで用いる話柄であつて、後述の『名公答問』序にも一例がみられる。さて、陽明はかかる立場から『五經臆説』を秘して人に示さず、開示を乞う高弟の錢徳洪には字句に拘泥して知的理解を求めることの弊害を説く。また『大学』の教説をも成書にすることを許さず、「此れ須らく諸君口口に相伝すべし。若しこれを書に筆せば、人をして一文字と作して看過せしむ。益無からん」と口承を命じ、『大学問』として筆録が許されたのは最晩年であつた。<sup>(11)</sup>王竜溪もまた、「大学の一書は乃ち孔門の伝授せる古聖の教人、為学の一大規矩」としながら、規矩を超えた「法外の巧」を悟ることによつてはじめて『大学』の世界に参入できるといつている。<sup>(12)</sup>こうした口承主義、心悟主義は、宋学以来の伝統でもあり、とくに心学者に共通する傾向といえる。陽明以前の陳白沙、莊昶、李承箕などいづれも例外ではない。<sup>(13)</sup>ここからいえば、心学、陽明学では、四書観が語られることがあつても、四書註釈は存在しなかつたのである。事実のちにのべる晩明の集成書の挙例をみても、陽明学の段階までの多くは、文集、語録の類いであつて、四書のみとまつた註解書の数量は決して多くはない。もちろん陽明の致知説、王良の淮南格物説、安身説、李見羅の知本説は『大学』の解釈を通じて論ぜられ、また陽明学派の講学のテーマは、ほとんど学庸に中心が置

かれてはいた。そして心学陽明学の四書観は、後世の註解に多大の影響を及ぼすのである。しかし註解という点からみれば、この段階まではかならずしも成果が豊かであったとはいえない。この背景としては正徳嘉靖朝における陽明学の活動制約が一因となつていよう。

しかるに隆慶万曆朝以降においては急激に多数の註解書が出版流通し、新四書学の独立が宣言される。ここから新四書学は新たに展開期を迎えるのである。

## 一一 晩明の註解書

最も浩瀚な、清初までの経学、四書学の目録である『経義考』は、まま錯誤がみられながら、作品排列の規準を作者の登科順にもとめている。そして未詳の人物については旁証によるか推定を加えて、全体として年代順の記述を目ざしていることが知られる。この登科順という規準は次にのべる『四書正新録』も採っており、一般的にいつて登科のちに著述の精神的時間的余裕が生まれること、後述からも知られるように、この種の作品は登科にはじまる作者の社会的知名度によって需要が喚起されることから、登科は著述の時期的上限と考えられ、成書や刊行の年が知られることの少ない註解書の排列規準として有効である。『論語』（四書関係を多く含む）の記事、著述を通年史的に記述する林泰輔『論語年譜』が、成書、刊行の年次に係けようとするため、多くの未詳の懸案を残しているのに比べて前者の方法は優れている。近年の作に言及すれば、傅武光『四書学考』の収録書目は前者を凌駕しているが、ただ内容的に理学心学に大別してさらにそれを細分する整理法をとっていることは、とくに明代の作品については一義的に性格づけることが困難であることからいってかならずしも有効な方法とはいえない。「不知宗派者」を大量に残さざるを得ないのは当然である。

『經義考』の論孟字庸のそれぞれの書目、および四書と總称される書目約千二百点のうち、明人の著述は四百数十点にのぼる。四書についていえば、三百数十点のうち二百点以上にのぼり、しかもその半数は隆慶万曆以降、百年たらずの期間の作品である。以前の作品でありながらこの期間に印行されたものも多かった。これによつてもこの晩期に多量の註解が出現したことがわかるが、さらに『經義考』に未収の作品も多く存在していた。①例挙すれば、李卓吾作と題される『四書評』は、楊起元『四書評』として収録するものに相当するだろうが、楊起元『四書眼』、上記の評と眼の合刻である『四書評眼』、『青雲堂四書評』、朱斯行『四書小參』、袁小修『四書纂』、憨山德清『大学綱目決疑』、『中庸直指』、雲棲智旭『論語点睛』、『大学直指』、『中庸直指』など、この期の個性的な作品をいずれも収録しない。②重訂、改訂によつて原本とほとんど別種の作品に変貌することがあるが、この重訂改訂本の存在に注意がむけられていない。③講章時文的な作品をあまり収録していない。最後の点については、学問的水準を考慮に入れたとも考えられるが、こうした作品の存在はこの期における四書学の盛況の内実とも考えられる点で無視できない。万曆二十四年刊、講章の集大成書である『正新録』は、登科年次によつて作者および各人について一点から数点の作品をあげている。洪武五、永楽三、宣德一、正統三、景泰二、天順二、成化七、弘治六、正徳九、嘉靖三十四と、引用作者は次第に増加し、隆慶十七、万曆五十八と、隆慶と万曆前半の三十年足らずで、以前の二百年間に比較する作者をあげている。講章時文には流行があるから、近年のものを多く利用することは当然であるとはいへ、それらが多く晩明に現れたことは文集類に記載される序跋によつても知られる。この種のブックメーカーであつた郭偉は、万曆四十五年序刊の『百方家問答』に五十五点の自己の纂著をあげている。

晩明期の四書説集成書はその時点で利用された註解を知りうる資料であり、『經義考』の記載漏れを補う便宜がある。万曆二十二年序刊の『国朝名公答問』は六十六名の四書説を集録し、二十三年序刊の『皇明四書理解集』は百十一名の姓氏と五十六点の書目をあげる（姓氏が多いのは集成書からの引用を含むためと考へうる）。これらは万曆中

期までの、かならずしも講章に限らない、權威のある四書説の一応の目安となる。『名公答問』の増補本的性格をもつ『百方家問答』は姓氏として百四十七名、諸書総目として百五十一点をあげる。同じ四十年代の『刪補微言』には、明代以前の作家作品を含んで、二百九十七名、二百十点をあげるが、その増補本である『増補微言』には大部分が当時の新作であるところの四十六名の姓氏・書目を追加している(姓氏・書目については、拙稿「明代四書解釈書の基礎的検討」(二)を参照せよ)。

以上からみれば、隆万以降の晩明期にはおびただしい作品が、しかも加速度を増しながら著述出版されていたことがわかる。この期の特徴の一つは、この註解書の急速な量的増加であったといえよう。

この事態の背景には、印刷文化の進展があったことは勿論だが、同時に陽明の従祀を頂点とする思想統制の緩和によって、以前からの蓄積に一挙に陽の目があてられたことができる(陽明の従祀のもつ思想的意義についてはここで詳論する余裕はない)。

ここで言及しておきたいのは、註解書の増加は、科挙受験用の需要に呼応する側面が強いことに關してである。いかえれば、晩明の註解書は科挙用に利用されることを期待するものがほとんどであった。講章時文のほかにも、たとえば『蒙引』が『新刊挙業精義四書蒙引』と題して刊行されるように、科挙の勉学に供しうることを明示する記事を記載することが多い。程朱学的経註に準拠して八股文を作成する必要があったから、勉学に供されるのがまず第一に程朱学的経註およびその疏釈であったことは論をまたない。この種の作品のほとんどはそうした利用を期待していた。ところが次節で述べるような、程朱学経解を批判し、さらには四書に釈老を牽強なまでに附会する、ほとんど註解とはいえない随想に至るまでの作品も、科挙と無縁であったとはいえない。

すでに弘治二年の順天郷試に禁約を申明し、「文中、空・定・慧の三字を許さず、禅語に渉るを以てなり」(『笑笑録』卷五「歇後箴」といった)というから、晩明にはじめて現れた現象ではないにせよ、釈老語が科挙の程墨文にまで使用



され物議をかますのは、やはり晩明の特微的事態である。顧炎武は隆慶二年会試程文にはじめて『莊子』の語を用いてからの五十年間に、「挙業の用ふる所、釈老の書に非ざる無し」といい、崇禎年間に禁令が復活してからも、「士大夫皆な幼より時文を読み、時文に習染さる。習染已に久しければ、不経の字、筆を揺せば輒ち来たる」（『日知録』卷十八「破題用莊子」と、晩明期のこの風潮がついに改められなかったことを指摘している。事態は識者の憂慮するところとなるのは当然で、万曆十四年の沈鯉の上奏（『明会要』卷四十七「選舉」一所引）、同三十年の馮琦の上奏（『日知録』同上「科場禁約」）などは事態の指摘と罰則を進言している（『日知録』卷十八「挙業」をも参照せよ）。実際に、万曆二十八年、「無去無住、出世住世」の仏語を用いた四書義が摘発されて罰停五科に処せられ（同上原注）、崇禎七年十二月、論策に禅語を用いた七卷の試録が摘発されて考官は削籍され（『国権』卷九十四）ている。このように、「場屋中、最も禁ずるものは禅家の語」（『朱文肅公集』「倪葵川経稿題辞」）のたてまえがとられる。老莊語についても同様で、万曆四十年序刊の『四書主意心得解』に、当今の莊子（南華経）を酷好する者が聖經に附会しようとする傾向があることを指摘して、「夫れ南華と聖言と、本と自ら氷と炭。但だ累科嚴禁すれば、此の風稍く息む。間々用ふる者有るも亦た収録せず」というから、釈老語の使用に対してしばしば禁令が下されたことが知られる。

禁令により影響されながらも、なにゆえに釈老語が場屋にもちこまれるのだろうか。それはもちろん釈老を好む風潮の反映であり、また習染する時文がすでに釈老に浸潤されていたために、「筆を揺せば」無自覚のうちにもたらされることもあっただろう。しかし僥倖をねがってまで狂奔する挙業の人士が、不用意にも、あるいは、罰則を覚悟して釈老の主張を場屋にもちこむはずがない。思うに釈老語の使用によって及第を得られる可能性があったからにはかならない。顧炎武の指摘する、会試程文（「由誨女知之章」）に五経未見の「真」字を用いたのは主考官李春芳であるが、彼は同考官に「知は只だ真偽を論じ、多寡を論ぜず」との観点から集註の解釈は『論語』の本旨を捉えていないと述べた（『四書刪正』序）から、明らかに集註批判の意図を籠めて程文を作成したのである。袁了凡はこの程文を「千古

の絶唱」と讃えるのだが、考試官、官僚の性向が挙士業に与える影響の大きさはいうまでもない。万曆五年の会試墨文に、「宗門の糟粕」を竄入したとされる楊復所は南京翰林学士、国子祭酒、南京礼部侍郎を歴任し、儒積の本質的共通性を主張して三教同旨の闡明につとめた焦竑は、万曆三十五年順天郷試の同考官に任じ、また仏教好きの陶望齡は同三十一年應天郷試の主考官をつとめている。こうした積老の好尚が流行し、積老を好む人物が高官に任じ、考試にたずさわる状況のもとでは、積老語の使用によって高第をうる期待が抱かれたことは不思議でない。焦竑が同考官に任じた順天郷試では「場中の人俱に老莊語を用い」、それにより彼は挙子と結託を図る、いわゆる関節の譴疑をかけられて黜けられた。関節とみるのが不当とすれば、挙子が焦竑の性情に適う文体を選び、期せずしてかかる答案が得られたと考えるほかはない。

以上によって積老語を駆使する奔放な四書解までもが、科挙の勉学に用いられたことは明かであろう。積老は挙業上にも必須の知識であったともいえる。逆に科挙上の需要が多量の出版を促したとも考えられる。多くは坊刻本の科挙用の参考書について、『四庫提要』は、「按ずるに古書の存佚は、大抵、数の稽ふる可き有り。惟だ坊刻の四書講章は則ち旋<sup>たちま</sup>ち生じ旋ち滅す。……(算を善くした古人)隸首と雖も其の数を算ふる能はず」と浮草のごとき生命の短かさを指摘する。したがって以上に述べた以外にも晚明の当時にはなお多く存在したと推定される。この生命の短かさは、受験技術上から新奇を追いもとめることに起因するだろう。程墨の傾向は時代によってしばしば変遷がある。<sup>(18)</sup>註解書の内容もそれに従って重訂、増刪、新編がくり返されるのである。

この種の作品は学問的レベルからは無視してよいものも多い。しかし「今の人経書を読まざる無きは、率ね以て時芸の資と為すのみ。時芸を為さざれば則ち経書を読まざらん。是れ時芸は経書の餼羊たるを知るなり」(『制義叢話』巻一)といわれるように、科挙は経書の学習を促す契機であったことは疑えない。晚明の四書をめぐる論議はもちろん学問的関心、思想的欲求に根ざしている。しかし、そうした論議が右の意味での広汎な経書の知識に支えられていた

ことを看過できない。この期の四書学の盛況の背景には科挙が存在していたのである。

### 三 四書学の展開と方向性

註解書の量的増加に比例して、内容も多岐にわたっている。晩明の蔚然は、明代四書説につきぎの五変があるといふ。①蔡清の『四書蒙引』から林希元(次崖)の『四書存疑』、陳琛(紫峰)の『四書淺説』に至る程朱を羽翼する説。②陽明から王畿(竜溪)、羅汝芳(近溪)に至る朱子と対抗する説。③唐順之(荆川)の『四書拙講』から李丕顯(貞菴)の『四書達説』、鄒泉(嶧山)の『四書折衷』のごとく①の路線を固守する説。④焦竑などの『四書理解集』、袁七澤の『海蠡編』から、袁黄(了凡)の『四書刪正』、李卓吾の『説書』のごとく諸子雑家、禪玄説をまじえて、程朱と戈矛するのみならず孔子を無視(洙泗を弁髦と)する説。⑤朝廷の禁令を考慮して陽に朱子を尊んで陰に異端をまじえる説(『四書説約』序)。これによれば程朱派ないしは亜流、陽明派、新陽明禪玄派、折衷派が存在したことになる。③④⑤がほぼ晩明展開期の様相を示すが、程朱を固守するものも新説を考慮に入れざるを得ず、新説も科挙上の必要から章句の分章をまもり、禁令を考慮して章句集註を遵守するたてまえを表明するのであって、一義的に分類はできず、混淆こそが当時の具体相であったといえる。しかし共通する傾向は、もっぱらの受験書を除けば、いずれも独自の、個性的な四書説を志向する点にある。晩明には個性、独創が尊ばれその価値が容認されたのである。この晩明の新四書学の理念は、万曆四十年頃の婁堅の発言によく表現されている。「昔者、通儒の論を聞くに、以為らく聖人の経は衆多異同の説を存し、以て読者の自得に待つべし」と(『重較四書集註』序)。

そして宋儒に対抗する衆多異同の説は、自己の存在価値を主張するようになる。『百家問答』は、永楽の大全の諸説を参入しない理由を、「皇明、洪(武)永(楽)より今にいたるに迄び三百年、茲に于て徳教融洽し、文運日に新

たに、名儒碩儒森然として疊出し、經款を主盟す。厥れ真伝有り。豈に遠く宋儒を駕して上らざらんや」と説明している。周汝登も經書の学が、「我朝の諸儒に至って始めて大いに著明し、旧時の窠臼、翻却して殆ど尽く」とし、「僕近ごろ本朝の諸儒の所解を輯めて一帙を為らんと擬す」(『東越証学録』卷十「与喻中卿」と、宋儒に對抗した明大全の編輯意図をもっていた。科挙上の需要に応えるものであったにせよ、この期の註解は、それぞれの独自の存在価値を主張し、それらを集約した集成書が刊行され続けたということができる。

この期においては陽明学の影響が著しかった。官僚層の間に、陽明の従祀に「与する者十の三、否とする者十の七」であるのを押しきって従祀が実現したのは、陽明学に従う者が「十の七」という学术界の情勢にもとづくのであろう。<sup>(19)</sup>新本と比較して『古本大学』テキストの古態性、信憑性は、ほぼ共通認識となっていたし、心即理といい、日用現在に道の具現をみようとする陽明学が広く受容されていたのである。しかしながら陽明の段階に比較すれば、四書学上のこの期の特徴をいくつか指摘できる。①口承主義ないしは著述禁欲志向の稀薄化。この期においても註解が自己目的化することの警戒が忘れられたわけではないが、『蔵書』『続蔵書』、小説の批点、経解としての『説書』を著した李卓吾や前述の周汝登など、陽明から三伝四伝の門流には著述への志向がみられる。このごろはいわば著述文化の時代であり、それが四書学上の多量の註解となった一因である。②經書觀、聖人觀の変遷。良知の万人共有性を説いた陽明は、觀念上において凡人を聖人の領域に引き上げたのだが、この期においては『四書評』に典型的にみられるように、日用現在の人間の具有する性格を逆に聖人に投影させ、經書の聖人像を肉づけすることがみられる(この点に関しては今後の検討にまっべきである。<sup>(20)</sup>)。③积老思想をとり入れた奔放な解釈。そもそも宋学自体が周知のように仏教老莊哲学の批判的継承によって成立したのであり、そこに积老的觀念の残存を指摘することは容易である。王竜溪に従って緒論を得ながら、三教合一論には批判的であった張元汴は、近來の講学に「頭面」「色相」「業障因縁」など「純ら禪語を用ひる」傾向を批判し、「活潑潑は素と猶ほ見在のごとし。程朱の大儒も固より嘗てこれを言

ふ」との反論には、「夫れ偶々一たびこれに及ぶは害無きなり。而るに連篇累牘に純ら其の語を用ふるは可か」(『張陽和文選』卷二「寄馮緯川」)と答えている。ここに象徴されるように、釈老の影響という点では宋儒と晩明の差は量的多寡にすぎないともいえる。しかしまた、右にいう連篇累牘に仏語を連ね、講学になまのまに釈老語を用いて論議が重ねられたのは、やはり晩明の特徴であった。<sup>(2)</sup>

この現象はそのまま註解書にもちこまれ、晩明期には序文、題記から本文に至るまで釈老的觀念、用語を駆使して文章にあやを添えることが、ほとんど常識となっていた感がある。たとえば蔚然が④と同傾向の作品とみなしている『名公答問』の項廷堅序には、つぎのようにいう。「夫れ法に法らざれば則ち事常なし。不法に法れば則ち妙に入らず。妙入を要むれば法も可なり、不法も可なり。魚得て筌を忘れ、柯得て斤を忘る。華嚴經に曰く、世尊、三昧の智力を得、魔道を超ゆと雖も現に魔法を行ひ、世間に随順すると雖も常に出世間法を行ふと。此れを知れば以て經義を知るべし。伝注は由りて以て經に通ずる所の法なり。其の未だこれを得ざるや、惡ぞ法に法らざるを得ん。其のこれを得るや、忘□の後、心神触発す。惡ぞ必ず不法に法るを得ん。心に各々法有り。各々三昧を具ふ。法によりて三昧に入り、三昧に法を忘るれば、其の聖經の旨義に於て符契の若くならん」。ここにいう、經解が自己目的化することが玩物喪志となり、かえって經書の旨義を見失うことへの警戒は、心学陽明学にも顯著にみられるのだが、これを仏教的な論旨を借りて表現するところに特徴がある。仏典を参照することもしきりに行われており、万曆三十二年序刊の『四書最勝藏』の引用書目には、釈老二氏として『華嚴經』『華嚴合論』『円覚經』『四十二章經』『弘明集』『法苑珠林』『永嘉集』『神霄經』『真仏通鑑』『雲笈七籤』『仙林編珠』をあげている。

釈老と接合する態度や理解の深淺はもとより一様ではない。『四書闡旦』の『論語』旁評に、「妙諦多無し」。「君子是れ仏、小人是れ魔」。「九年面壁し、一葦もて江を渡る」。「一串の牟尼珠。声声仏語、珠中従り吐出す」とあるのなどは極端な例で、一般には接合に慎重な配慮が加えられる。仏教教理に造詣深く、その思索を『四書湖南講』に展開

する葛寅亮<sup>(22)</sup>が、「好んで穿鑿を為し、故さらに意見を立つるもの」、「禪宗出世語を以て聖賢の経世の旨に入れ、本文と相ひ襯貼せざるもの」と当時の講説の二弊を指摘するが、後者は右のごとき作品を念頭に置いたのだろう。また『四書解縛編』は、たとえば『大学』伝七章を解釈して、『大学』の「意」論を華嚴の心意識論と接合させるように、仏教を援用しながらも、『大学』に「正」をいい、釈氏が「無」をいうところに毫釐千里の差があるとし、「皆自明也」(克明明德章)を解釈しては、「近時の義中に強迫をまたざることを以て、へ自く字を解する者あり。禪理に涉りて旨に非ず」と儒釈間に一線を劃そうとしている。このような作者の態度には、蔚然という朝廷の禁令への配慮が複雑にからんでくる。しかしいずれにせよ、釈老、とりわけ仏教が経書理解の視点と方法に大きな影響を及ぼしたことは疑いない。ところでなにゆえそれほどまでに釈老と接合しなければならなかったのだろうか。

かつて章句集註が経書に匹敵する權威を保っていた状況のもとでは、「文公(朱子)の集註、童よりこれを習へば、先入已に深しと為す。長ずるに及んでこれを疑へば、必ず曰く、朱註、幼にしてこれを資りて以て学を為すなり。豈に誤る所有らんや。況んや吾が質古人に逮ばず。古人已に定見有りと。故に曰く、これを信じて疑ひ無し。何ぞ怪しむに足らんやと」(『雙江文集』巻十「答戴仲常」)、と聶豹が指摘するように、先入見からの脱却は困難を極めた。釈老との接合は、こうした程朱学的経解からの脱却のテコであった。少なくともその役割を期待されたのである。<sup>(23)</sup>「学者註疏の為に惑溺され、其の真を得ざる」状況下における仏教の意義を焦點はつぎのようにいう。「釈氏は人心を直指して儒者の支離纏繞の病無し。故に陽明は偶々此に於て得力し、これを儒書に推して始めて其を理を得」(『澹園集』巻十三「答友人問」)。陽明がここに裨益されたか否かには議論があるが、右の文は晩明の註解における仏教が持つべき意義を正確に伝えている。万曆四十七年の『四書聞』姚文蔚自序には、かつて『四書通』を著したが心に協わず、「二氏を探索すること年有り、返りて吾が書を取りて、これを読めば、その有する所のは皆な吾が家の宝なり。その詮する所は吾が為めの箋釈なり」と、釈老二氏に沈潜することによってはじめて経義が明らかになったことを説いてい

る。およそ思想の転換期には異質の世界観の刺激が、視点の転回、新たな世界観の形成に寄与するが、釈老は伝統中国において宋学、清末思想の形成などに寄与するとともに、晩明においても、四書学に関していえば、程朱学的経書観を克服して新四書学を形成するうえに貢献するところがあつたのである。

陽明から晩明に至る新四書学の成立展開の過程においては、経書の註釈とはみなしえないような奇矯な主観的な発想を牽強に附会する作品も多い。しかし新四書学の営みによって程朱的四書観がほぼ完全に掘り崩されていったことを看過してはならない。このことは程朱的経書学の克服ないし否定的継承の上に成り立つ清朝考証学の前提条件を準備するものであつたからである。

道学の権威失墜を契機として、明代後期の経学は、陽明学と呼応して尚古的復古的傾向を示し、清朝学へと連なつていくことに關しては、すでに山本正一氏の卓論がある。<sup>(24)</sup> また四書においても古註疏、考証を重んずる考証的学风が晩明に興つていたことについては、宮崎市定氏が論じている。<sup>(25)</sup> ところで前述のごとき新四書学においても、章句集註の相対化の反面に、復古的傾向、古註疏への関心が高まることが知られる。『四書最勝蔵』には文献として註疏があげられ、『四書微言』の引用姓氏に孔安国、孔穎達があげられ、個々の経文についても「(古注は朱)注に勝る。従ふべし」(『慧眼山房説書』)などと、古註と朱註とが比較検討されていく。『四書評』『青雲堂四書評』はともに古註に好意的だが、とくに周汝登『四書宗旨』は、朱註批判の一方で古註疏を肯定することがしばしばみられる。もっとも汝登は自己の哲学的観点から古註を評価するにすぎず、実証的考証的な立場からする古註評価とは懸隔がある。<sup>(26)</sup> しかし婁堅が先の引用に続いて、「且つ漢人は古を去ること尚ほ近く、学に承受あり。其の説決して尽く廢するべからず」といい、『青雲堂四書評』に「今人、前人に如かざること每每此の如し。故に漢註を読むは猶ほ宋註を読むに勝ること多し」といい、『四書宗旨』に「漢の時、古を去ること未だ遠からず。必ず本づく有らん」などというのを見れば、新四書学の古註評価が復古的傾向を帯びていることがわかる。これは心学的経書解釈の単なる反動として清朝

の経書解釈があるのではなく、積極的に継承される側面があったことを意味するのではなからうか。個々の経文の章句の解釈についても、同様のことがいえるように思われる。

清朝においては四書は経書中の独立した一領域であるともみなされることはなくなり、四書学は五経の学、ないしは諸経の学にとって代られる。ところがこの四書の位置づけの変遷、経書学の再編についても、明代において萌芽がすでに準備されていた。朱子は『大学』を「孔氏の遺書にして初学入徳の門」、『中庸』を「孔門伝授の心法」とみなして、『礼記』の二篇を独行させ、とりわけ『大学』については大幅の改編を行なってまで、学術の根基にすえおいたのであった。しかるに陽明によって「古本大学」のテキストの価値が主張されるに至れば、朱子学の根基も、したがって学庸独立の意義も見失われざるを得ないだろう。もっとも陽明が学庸を重視したことは前述のごとくであり、門下についてと同様であった。羅汝芳もまた学庸を孔聖の親筆としている。しかし彼は同時に、義理からも次第からも『中庸』が先、『大学』が後とする。これはその門弟も指摘するように『礼記』の篇次と同じである。とすれば学庸をこゝとさらに独立させる理由も薄弱とならざるを得ない。近溪門下の管志道は、学庸二書は子思の筆になるといふ。これは宋儒の道統論を否定して孔子から子思に親授があったことを前提にしているが、孔子は『周易』を賛し『春秋』を脩めたのみとし、学庸を子思の作として孔子と直接の結びつきを否定することは、この二書を孔子の權威に根拠を置く「経」から、諸子的な二次作品へと無限に近づける可能性を含む。果して明末清初の陳確は、「大学の首章は聖經に非ず。其の伝十章は賢伝に非ざる」(『陳確集』別集「大学弁」) 秦以後の儒者の作だとし、『大学』を『礼記』に還すことを主張する。この論が当時に受けいれられたわけではない。しかし少くとも学庸二篇を『礼記』に還す気運は、熟していたといえるだろう。

朱註の遵奉祖述の長い期間を経て、明代中期以降四書学は新たな段階を迎え急速な展開をみるようになった。奇矯な仏典まがいの作品までもが現れた晩明の状況は、後世の篤実な経学者の眉をひそめさせるに充分であった。しかし



新四書学の執拗な営みは、後世の経学の基盤を準備する側面があった。そしてその営みは自らの四書学自体をも掘り崩していったのである。

清朝においても四書学は科挙の学に変貌して存続した。すでに晩明において、科挙の学でもあった四書学の継承と変遷についてはここで述べる余裕はない。<sup>3)</sup>

## 注

- (1) 四書を受容については拙稿「明代における記誦」(未刊)を参照。
- (2) 字音句読を朱註によりながらも、四書五経の学習にはまず経文の記誦が先行される。注1の拙稿参照。元末の人、劉商卿は隱者から「先経而後伝」、「執経以証伝」、「去伝読経」の読書法を順次授けられたという(『朱楓林集』附所収「贈婦新安序」)。このような経を重んじて、あるいは経のみを読む学習法をとることがしばしばみられる。
- (3) 『四庫提要』四書類を参照。『四書弁疑』は『通志堂経解』に収める。
- (4) 宋濂『朝京藁』巻五「御製論語解」二章後。
- (5) 『大学』の改定については山下竜二『大学・中庸』の解説を参照。方孝孺は「朱子亦曷嘗断然以為至当哉」(『遜志齋集』卷十「題大学篆書正文後」という。なお蔡清、林希元の改訂については『林次崖先生文集』巻四「改正経伝以垂世訓疏」参照。
- (6) この前後の記述は拙稿「明代前半期の思想動向」を参照。なお『四庫提要』は「弁疑録」として著録するが、『瓊台会稿』所収の周洪謨墓誌、および現存の(『経学叢書』本には『疑弁録』となっているから)前稿を訂正する。
- (7) 『万曆野獲編』巻二十五「献書被斥」を参照。
- (8) 『王文成公全书』巻二十六、錢德洪跋。
- (9) 同右「大学問」錢德洪序。
- (10) 注5所引の書。
- (11) 「大学問」錢德洪跋。もっとも陽明は『大学』『中庸』注の制作に関心がなかったわけではない(『全書』巻四「与陸元静」(二))。
- (12) 『王竜溪全集』巻八「大学首章解義」。
- (13) 注6の拙稿および『定山先生集』巻八「大梁書院記」、『翠渠摘稿』巻四「題嘉魚李氏学」を参照。

- (14) 拙稿『青雲堂』と題された明代末期の四書解について、およびそこに引くいくつかの拙稿を参照。なお右の書を「青雲堂四書評」と称することについては拙稿「四書評の余韻」(未刊)を参照。
- (15) 拙稿「明代四書解釈書の基礎的検討」(一)を参照。
- (16) 『日知録』卷十八挙業。
- (17) 『制義科瑣記』卷二。
- (18) 『制義叢話』卷一にその変遷を記す。
- (19) 『国権』万曆十二年十一月庚寅の条を参照。万曆末には程朱学を確守する者を探し出すことは困難であった(『求是編』諸序を参照)。
- (20) 拙稿「晩明四書解における四書評の位置」を参照。
- (21) 荒木見悟『明代思想研究』を参照。
- (22) 同右第十章を参照。
- (23) 拙稿「周汝登の四書学」を参照。
- (24) 「明代中葉以降の経学について」
- (25) 「四書考証学」
- (26) 注23の拙稿を参照。
- (27) 『四書一貫編』「論語総論」。なお智旭も『礼記』の篇次によることについては、拙稿「四書評の余韻」を参照。
- (28) 顧憲成は五経を完備させるため、程朱によって釐正された学庸を五経に還して『礼経』とし、『大極図説』『通書』、『小学』を論孟に配して四書としようとする(『小心齋劄記』卷九)。
- (29) 管志道については荒木見悟『明末宗教思想研究』を参照。
- (30) 志道の『大学』観については同右十章。また『楊若齋集』卷三「表章石経大学序」を参照。
- (31) さしあたっては『四書評』の継承にふれた注27所引の拙稿を参照。